



厚真高校1年の被災地ガイド

Vol.41 ^{け あげ は づき}
蹴揚 葉月さん

上厚真小学校5年生の宿泊学習先だった国立日高青少年の家で、胆振東部地震を経験した蹴揚さん。今春、5年間つむいだ地震への想いが強まり、町観光協会が行っている被災地ガイドツアーのガイドになることを決意しました。

“心が通い合う被災地ガイドをめざす”

「地震を知ったのは、あの日の午前8時過ぎだったと思います。引率の先生から、『厚真で地震がありました。皆さんのご家族は大丈夫ですよ』と説明を受け、不安や怖さを感じましたが、少しだけ安心しました」。昼食後の午後1時ごろ、迎えに来たバスに乗り、う回しながら厚南会館に戻ったのは午後3時ごろ。出迎えてくれた母から「家族にけがもなく無事だよ」と聞いて、肩の力が抜けるように安心したことを覚えています。「あれから、5年経つんですね」。

地震後、祖父に連れられたり、自分1人で何度か、被害の大きかった吉野地区に足を運びました。「最初は、まだ崩落土砂が残っていて、自然の恐ろしさを体感しました。その後、土砂は撤去されて水田が広がり、むき出しの斜面に少しずつ緑が戻りました。5年でこんなに景色が変わるのですね」。周囲の景色に視線を送りながら、毎年変化

する大好きな緑の風景に心を動かされています。ふるさと学習や被災地ガイドツアーにも一般参加し、胆振東部地震に寄せる想いが消えることはありませんでした。

「被災地ガイドやってみないか?」。今年5月、厚真高校の公営塾「より道学舎」の指導者の言葉に背中を押されました。帰宅後、夕食を囲みながら家族に打ち明けました。「本当にできるの?」と聞かれて即答。「やるしかないんだ。厚真が好きだから」。家族も快諾しました。

被災地ガイドの資格は不要です。基礎知識と、自分の言葉で経験を語ることができることが条件です。うわさを聞いた町観光協会の原事務局長は「ぜひ、実現して欲しい」と期待しています。

「今の町民が居るから、今の厚真がある。自分や町のためにも、心が通い合うガイドをめざします」。

厚真で暮らす人、働く人、応援してくれる人、訪れる人・・・
みんな、みんな、**ATSUMA LOVERS**